論文の内容の要旨

論文題目　　朝鮮神話の源流
——「バリ公主神話」と「ダンクン神話」を巡って——

氏名　　金　香淑

朝鮮神話は『三国史記』（1145年）『三国遺事』（1281年頃）などの文献で伝わる文献神話と、民間で伝承された口伝の巫俗神話がある。巫俗神話は、文献神話と同一の構造（「本プリ(본풀이)」＝神の由来や神聖性を叙述した部分）を持つとされ、これらの巫俗神話が長い間口承されたあと、文字として採録され、文献に定着したという見方が、今日の学界の定説となっている。ところが、中世の文献に記述された神話と、近代になってから採録された巫俗神話のテクストには約一千年という時間的隔たりがある。さらに、文献神話の代表とされる「ダンクン神話」が、個人の編纂である『三国遺事』には記されているが、正史たる『三国史記』には記されていないという記録の問題も存在する。そのため従来の朝鮮神話研究は、神話テクストそのものの分析より、歴史的背景などを絡ませ、神話の原型が失われ操作されたことを前提としてなされ

てきた。特に、文献神話に見られる仏教的な用語や要素を、表面的な「潤色」あるいは「仮借」に過ぎないとし、神話の原型を推定することで「朝鮮固有のもの」を探ろうとする傾向が強かった。このような流れは、崇儒抑仏の政策を標榜していた朝鮮王朝時代に始まり、朝鮮の文化・民族を抹殺しようとした日本の植民地時代、これと立て続けにアメリカと西欧の影響下で始まった近現代を通して連綿と続いている。

筆者は拙著『朝鮮の口伝神話　「バリ公主神話」集』（和泉書院、1998年）において、文献神話と同一の構造が指摘され、朝鮮神話の原型とされる口伝の「バリ公主神話」について、複数の異本を日本語訳した。その上で、従来踏み込んだ研究のなかった「本プリ」について分析し、「バリ公主神話」の神の神聖性がどのような世界観に基づいて語られているのかという問題を検討した。本論は、そこでの試論を発展させ、口伝神話と文献神話を同時に考察の対象とすることで、朝鮮神話の本質と成立の経緯に迫ろうとするものである。

本論では、まず口伝神話の重要な要素である巫俗について概説的に述べた上で、「バリ公主神話」の各異本の特徴を明らかにした。遺棄された末娘が、死にかけた両親のために様々な苦難を経て蘇生薬を入手するという「バリ公主神話」のストーリーは、朝鮮の伝統的な霊魂観に加えて仏教思想を反映している。特に主人公の苦難の道のりが、仏教の「十王経」の思想に基づいて展開されている事実は、テクスト分析で得られた重要な結果である。さらに「本プリ」の考察を通じて、神の神聖性が帝釈天など仏教の神に保障されていることが実証された。

次に、朝鮮神話の代表とされ、「バリ公主神話」と同じ構造を持つと指摘される「ダンクン神話」を取り上げた。戦前そして戦後の韓国・北朝鮮において、ダンクンが民族自尊の象徴として、民族の球心的役割を果たしてきた経緯を考察したあと、従来の研究における最大の論点に迫った。すなわち、「昔有桓因【謂帝釈也】」というテクストの記述は、『三国遺事』の編者たる僧・一然の「潤色」と見なせるのかどうか、という問題である。テクスト分析の結果、ここでいう「帝釈」はその性格や役割においてインドラ神や仏教の帝釈と

重なり合っていることが明確になった。「ダンクン神話」に表れた「天」と「天下」の関係は、王の権能とその世界が仏法の主護神たる帝釈に保障されていることを示している。このような仏教的世界像の構築には、『三国遺事』の根底をなす「新羅中心思想」（三国のうち、地上仏国土を標榜した新羅を理想の国家として最上に置く考え）が大きく影響している。『三国遺事』を一つの作品として見た場合、編者の意識が反映されるのはむしろ当然のことであり、あるがままのテクストを直視せず、その「原型」を推定することに多くの労力を費やしてきた従来の研究方法は誤りであったと言える。

「バリ公主神話」と「ダンクン神話」について考察した結果、朝鮮神話における仏教の役割は、先行研究で言われてきたのより遥かに大きいと考えることができる。従来、朝鮮神話の根幹は「巫俗原理」であるとされ、朝鮮固有の「天神思想」がその源流であるとされてきた。しかし、テクスト分析の結果、「ダンクン神話」から「天神」の存在を読み取ることは不可能である。また、口伝神話を文献神話の「原型」とする、いわゆる「巫俗神話起源説」も根拠に乏しい。むしろ、時代や巫堂の個性によって変化する巫歌の特性、そしてそこに濃厚に反映された「新羅中心思想」から考えれば、口伝神話の方が文献神話を題材として成立した可能性を指摘することができる。歴史書等から朝鮮における巫俗の実態を考察すると、今日見られる口伝神話の形が、三国時代以前から伝承されていたとは考えられない。従来の「巫俗神話起源説」は、中世の文献を通じて古代神話を推定するという、方法上の重大な誤りを犯している。結論を言えば、「朝鮮神話」は「朝鮮固有のもの」から形作られたのではなく、『三国遺事』などの作品において、仏教など外来思想の枠組みの中で初めて成立したと考えられる。

現代韓国では、日本神話の研究も、朝鮮神話の「原型」を推定するための傍証として利用されているという実態がある。本論の結論は、朝鮮神話の成立史に新たな観点を提示するものであり、将来の日韓神話の比較研究など、東アジア諸文化の成立を解明するためにも重要な契機となるだろう。